

私が知覧で学んだこと

近畿大学附属和歌山中学校

二年

柳井

萌花

終戦から七十年目の節目を迎える今年、私

は鹿児島県の知覧特攻平和会館を訪れた。

知覧特攻平和会館のある知覧町は、戦争が

始まるまでは武家屋敷が立ち並び、江戸時代

の風情が残る静かな町並みだった。

しかし、知覧飛行場の建設により、町の雰

囲気は一変。特攻の第一線基地の町へと大き

く変貌していった。

「特攻」。その言葉の意味は以前から知っ

ていた。

大きな爆弾を付けた飛行機と共に、敵艦に

体当たりすることだ。

戦争については、いろいろ知っているつも

りでいたが、私はここで、戦時中に沢山の特

攻兵と交流を持っていた方のお話を伺うこと

が出来て、その知識が浅はかだったことを思

い知らされた。

その方は、私たちに決死隊と必死隊というものについて教えてくれた。決死隊は、危険な攻撃などをする部隊で、死を覚悟して任務に励む。生きて帰れる確率よりも死ぬ確率の方が高いということだ。

一方の必死隊は、その文字の通り必ず死ぬ部隊。つまり特別攻撃隊、通称特攻隊だ。燃料は片道分、生きて帰れる確率などない。

私たちが普段使う決死や必死という言葉の部隊が存在したことに驚き、また、その言葉の意味の無残さに戦争というものの恐ろしさを改めて感じた。

また、その方は私たちにこんなことを問いかけた。
「あなた方は、明日死ぬと分かっているから歯を見せて笑うことができずか？」

私なら到底無理である。私に限らず、ほとんどの人が無理だと思う。
そんなことを考えていると、その方は一枚の写真を見せてくれた。

そこに写っていたのは、楽しそうに笑う五人の軍服を着た少年たちだった。『ほがらか隊』というクルーだそうだ。年齢は十七歳から十九歳、つまり今の高校生、大学生の年齢にあたる。

私はその写真を見て、何かの記念日の写真だと思つた。犬を抱えて笑う少年もいれば、おかしな顔をして笑う少年もいるからだ。

しかし、この写真は何の記念日でもなく、ただ明日、特攻兵として出撃するという時、たまたま通りかか、今朝日新聞社の記者によつて撮られた写真だという。

私は驚いた。彼らは明日出撃と知つていながら、向けられたカメラを前に笑っているのだ。なぜ、こういう風に笑えるのか、私は疑問に思つた。するとその方はもう一枚の写真を見せてくれた。写っていたのは手紙、私はそう捉えた。しかし、それは手紙ではなく感謝の言葉がきれいにつづられた母親への遺書であった。

「最期で最初の孝行に笑ってゆきます。」
この言葉に私は、胸を締めつけられる思い
だった。

戦時中、彼らの死で、彼らが特攻に行くこ
とで、戦況を大きく変えることができたのだ
ろうか。またそれは、親への孝行になったの
だろうか。

私と、ほとんど年の変わらない子供たちが
戦場に駆り出され、特攻兵として天山の命が
失われたことは知っていたが、彼らの気持ち

に直接触れたのは、これが初めてだった。

母親への感謝の言葉を遺書として残し、笑
って散って征った彼らの本当の気持ちは、彼
らにしか分からないうれしく、
しかし、楽しくてたまらないうれしくて
たまらないと思っていなことは、私たちに
でも分かることではないうか。

今日までの七十年間の平和を築いてこられ
たのは彼らの犠牲があったからこぞだとい
うことを忘れてはならない。

そしてその犠牲は、決して無駄にしては存
らないものだ。

話を聞き終え、展示物に目を通し、会館の
外に出ると、様々な団体や県から寄贈された
桜の木で沢山のセミが鳴いていた。

私は、そのセミの声を消さぬよう、静かに
平和の鐘を鳴らした。

七十年前、ここから飛び立ち、帰らぬ人と
なつた何人もの特攻兵の方々の冥福と、これ
からの日本の平和を願つて。